

『小樽高商の人々』の編集から百年史編纂へ

平井 孝典

(小樽商科大学百年史編纂室)

荻野富士夫

(小樽商科大学商学部)

はじめに

小樽商科大学は、2004年4月1日現在、教員数は130名、職員数は71名、学生数は昼間2136名、夜間429名、大学院92名が在籍している。沿革を示すと、第五番目の官立高等商業学校として小樽高等商業学校が1910年に設立され、1944年には小樽経済専門学校と改称、1949年に小樽商科大学となった。現在、商学部だけの単科大学で大学院修士課程まで設置されている。2004年4月には、大学院アントレプレナーシップ専攻(MBA)も設置された。学部生は経済学科、商学科、企業法学科、社会情報学科に所属するが、一般教育や言語センターの教員によるゼミを選択することもできる。

本学での百年史編纂は、創立100年に向けて、当面は資料の収集と整理に取り組むことが中心となるが、その前史には、小樽高商史研究会の活動、2001年の小樽高商小樽商大90周年展と翌年の『小樽高商の人々』の出版および2002年の小樽商科大学史料展示室の設置がある。また、編纂作業に関連するものとして、図書館に未整理のまま残されていた旧植民地関係資料の整理も行っている。

I 『小樽高商の人々』の編集にあたって

1 『未定稿三十五年史』『緑丘五十年史』について

本学の学校史には、『未定稿三十五年史』と『緑丘五十年史』がある。前者は、戦時下に編纂されたもので、未定稿として図書館に保存されている。皇国史観の色彩が非常に強いものである。後者は、実質的には本学名誉教授・浜林正夫が一人で編集執筆したもので、「学園のルネッサンス」といったテーマのとり方など、従来の学校史とは異なった、異色の構成となっている。なお、六〇、七〇、八〇周年には、新たな校史編纂は行われなかった。

2 『小樽高商の人々』と史料の収集活動 小樽高商史研究会について

『小樽高商の人々』は九〇周年を記念して出版されたものであるが、一九九〇年代を通じて活動してきた小樽高商史研究会の成果でもある。この研究会の参加者は、倉田稔（一般教育・教授、社会思想史／経済思想史）、今西一（経済学科・教授、日本経済史）、荻野富士夫（一般教育・教授、日本近現代史）である。研究会では、大学史編纂の意味・方法を再検討し、外国人教師（フランク、マッキンノン、ネフスキーら）に着目するなど、従来の編纂とは異なる視点で活発な議論を行った。史料の収集活動については、ひとつめに、在学・在職者およびその関係者（板垣与一、南亮進、松田芳郎、浜林正夫ら）からの聞き取りを行い、文字資料では残存しにくい、緑丘の人々の日常を明らかにしようと努めた。二つめに、八〇年代まで刊行されていた学生新聞『緑丘新聞』の復刻や、今まで確認されていなかった号の発見等があり、掲載されている記事について詳細に調査をした。三つめに、行政文書などに関しては、学内の倉庫から、文部省からの受領書類や送信書類の控えを収めた『秘文書綴』などを集め、また、国立公文書館、国立教育政策研究所などで史料の収集を行った。四つめに、卒業生から寄贈された、かつて緑丘の一場面を飾った品々や、学内研究室で発見された文書などの整理をした。五つめに、図書館蔵書の中から戦時下の閲覧禁止本や占領軍没収の印のある書籍の確認などを行った。『小樽高商の人々』の編集執筆活動が百年史編纂機運の呼水となり、また、一連の大学改革の中で大学のあり方を問うものになればと考えている。

3 『小樽高商の人々』の内容とその特徴

執筆者は、前述した小樽高商史研究会のメンバーである。目次をそのまま記すと、「第一編 小樽高商の校長群像／—実務教育の理念と実践——初代 渡辺龍聖／二 高商「ルネサンス」の時代——第二代 伴房次郎／三 戦時下の高商教育——第三代 苫米地英俊、第二編「高商アカデミズム」の人々／ヨーロッパとの出会い——大西猪之介「囚われたる経済学」／二 自由主義経済学者の苦悩——手塚寿郎の数理経済学／三〈人口学〉の創造——南亮三郎の人口研究／四 緑丘の外国人教師、第三編 小樽高商に学ぶ／一 草創期の学生たち——「緑丘スピリット」の醸成／二 文学への旅立ち——多喜二と整／三 大正デモクラシー下の学生たち——軍教事件前後／四 戦時下と戦後の学生たち——繰上げ卒業・学徒出陣・民主化」となる。このように三部構成としたのは、読みやすさに配慮しただけではなく、三代の校長在任期間による時期区分にも対応している。目次からも分かるように、それぞれ個性的な一時代を築いている。内容については、例えば、大西猪之介、手塚寿郎、南亮三郎に代表されるような、いわゆる「小樽学派」についてもその研究内容を明らかにしようと努めている。また、個性豊かな外国人教師や学生たちの実像にも迫っている。緑丘と戦争との関わりについても紙数を削いているが、残念ながら、戦後の新制大学部分については今後の課題である。

4 高商史研究会の成果等で90周年展を開催

研究会の成果を踏まえ、荻野の計画立案で開催されたのが90周年展である。市立小樽文学館を会場とし同館の協力で2001年10月12日から11月25日の間に催され、2000人余りの入場者があった。展示物は創立期から現在までの、行政文書や学生新聞の現物の一部およびそのコピー、学徒出陣関係の日章旗などの現物、3代目校長苫米地英俊の大礼服と彼が捕獲した熊の毛皮など多岐にわたる。この大礼服などは、苫米地が小樽を離れるときに市立小樽博物館に寄贈したもので、小樽商科大学のアーカイブズ史料は大学の他に、この博物館と市立小樽文学館にもあることになる。なお、90周年展を機に製作された1931年ごろの旧校舎を復元したジオラマは田中真理氏によるもの

である。開催期間中に行われた記念講演は、11月3日に倉田稔「小樽高商創立と多喜二・整」、11月10日に荻野富士夫「小樽高商の学生たち」（いずれも同館研修室）である。ミニコンサートは11月23日に小樽商大グリークラブにより「伊藤整『雪明りの路』より」（特別展会場）と題して演奏された。

5 小樽商科大学史料展示室の設置

展示会の終了後、3ヶ月程を要して作成した約500点のパネルや荻野の整理した史料の行く末を考えていた時に、秋山義昭学長の強い意向もあり、2002年8月15日の戦没者慰霊の日までにそのパネルや史料を用いて史料展示室を学内に設置することになった。その日には毎年多数の卒業生が来校する。90周年展と同様、学内からの特に学生や職員の協力も得て、三分の一ほどの史料を展示した。事務棟1階に置かれていたジオラマも史料展示室中央に運び込まれた。展示室の中央には三つのガラスケースがあり、旧校舎のジオラマが納められたものをはさむように、戦争関係の資料がならべられているものが奥に、そして小林多喜二、伊藤整の著書、生徒銓衡表の実物などが納められているものが手前にある。「生徒銓衡表」は、いわば学校側の就職斡旋のための個人情報カードである。ご遺族の許可を得て史料展示室に展示しているが、二人とも中学校の教員が第一志望であったことが分かる。この二人については、成績表のカラーコピーも展示しているが、英語の成績が比較的良好な点は共通している。室内三方の壁には、右回りに在任順に、ほとんどの場合十年前後の在任期間であった校長、学長の肖像画がかけられている。初代校長渡辺龍聖の右どなりは、本学の実学教育の場、石鹼工場の基礎を築いたフランクのレリーフである。歴代校長の肖像画に重なるように、時代ごとに、行政文書や関連する資料がガラスケースに並べられ、あるいは壁や天井にパネルが貼り付けられる配置となっている。パネルの多くは、『緑丘新聞』の記事の白黒あるいはカラーのコピーや行政文書のコピーである。ニコライ・ネフスキーの履歴書のような実物の行政文書も現在、展示されている。残存状況にあわせるように、戦前のものが多い。その他には、第1号の卒業証書、在校生、卒業生や教員の筆による掛軸、寮で使用されて

いた皿、古い計算機など授業で利用されていた文具類、試験の答案などもある。

Ⅱ 旧植民地関係資料の整理

1 資料整理のための学内プロジェクト研究への申請について

旧植民地関係図書資料の整理は、2003年度に学長裁量経費のプロジェクトとして申請し、採択された。かつて図書館で仮整理が試みられたこともあるが、今回整理の対象としているものは、いままでその所在はほとんど知られていなかったものである。利用・整理公開への要望については、学外研究者からのアドバイスを得て整理方針を確立、実際の作業を2003年の11月より開始した。百年史編纂作業の一環という位置づけでもある。なお、2004年度も申請し予算の交付が認められた。整理の実際については後述するが、今後の方向としては、マイクロ・フィルムによる公開、デジタル化、本学全体の「旧植民地関係図書資料」総合目録の作成が課題である。この総合目録は、図書館一般書庫にある「旧樺太関係資料」との接続も考慮される必要がある。また、旧植民地関係図書資料を活用した研究プロジェクトなども考えたい。

2 実際の整理作業などについて

作業を開始する際に、大分大学経済学部教育研究支援室、滋賀大学経済経営研究所、山口大学経済学部東亜研究所、横浜国立大学経済学部附属貿易文献資料センター、拓殖大学図書館、北海道大学附属図書館、一橋大学経済研究所附属社会統計情報センター、学習院大学東洋文化研究所から目録をいただき、参考とした。目録とともに手紙などで詳細なアドバイスをお送りくださった方もいる。とくに大分大学の20年前の仕事の経緯の報告書は今回の仕事だけではなく、今後の学内史料を順次整理してゆく上でも学ぶべき点が多いと思われる。また、国文学研究資料館アーカイブズ研究系の加藤聖文先生、北海道大学の白木沢旭兎先生、竹野学先生、滋賀大学の阿部安成先生、江竜美子先生からも有益な助言をいただいた。なお、全体の予算は、前述したよ

うに、初年度は約180万円で、内訳は中性紙が100万円弱、人件費が40万円、そのほかパソコン、プリンターなどを購入した。

整理の対象は、本学の図書館地下書庫にデータもカードも基本的にはなく、従って、アジ研の目録にもなく、残存していた数千冊の刊行物を中心としたものである。「満洲」のものが多く、満鉄のものが目立つが、植民地関係の機関、会社、個人の講演記録、研究会のガリ版刷りなど、雑多なものである。この旧植民地関係の図書資料が、どういう経緯で図書館の書庫に最終的に集められたのかは今のところ分からないが、後述するように、もともと学内の各組織で扱われていたものが集められているようである。史料保存を物理的な面で研究されている方が本学の図書館に来ると、全体として、本州の大学図書館に置かれているものと比べて相対的にその状態のよさに驚くことがあるが、しかしやはり、劣化が随分進行している。一度は物理的に捨てられたものもあるようで、靴の踏み跡が付いているものもある。今回は、これらについてだけ目録を作成し、検索できるようにしようという意図で作業を始めた。

次に分類方法について言及したい。十進分類法を基本としつつ下位分類を作るという方法もありえるが、やはり旧植民地関係の史料群としてまとまった形で考えることにした。そもそも商大の図書館が採用している分類は、分類が更新されておらず、下位分類以前にも環境問題など新しい分野に対応することに困難がある。推測だが、その結果、以前本学の図書館職員が、ひとつおりの資料を見てチェックしたりカード化しようとしたことがあるようだが、同じ番号ばかりになるのであきらめたのかもしれない。実際、本学図書館書庫に混入しているものは、ラベル番号の点で言えば非常に扱いにくいものである。本来隣同士であるべき本が棚のはしとはしに分かれてしまっているものもある。ともあれ、①「満洲」、中国、朝鮮、台湾、東南アジア、アジア全体に関係するもの、その他の地域、と地域で大別し、そして②出所別に分類することにした。

資料全体の状況について、旧植民地関係のものは、前述したように、すでに図書館の書庫に多くのものが混入している。したがって、今回のものはその一部ということになる。抜き刷りのようなものや定期刊

行物で寄贈を受けたと思われる号だけというものがかなりあり、中には小樽鮮満案内所など北海道で出版されたものや、教員が出張の際に購入したのではないかと推測される旅行案内のようなものもある。整理されていなかったのが幸いして、寄贈願いの手紙などもそのまま挿まれたままになっているものもある。出荷時におり込まれたと思われる月報のようなものなどもある。多くのものは、雑誌を含めて、継続的かつ定期的に購入していたというよりも寄贈を受けたものが多いように思われる。ただし、受入の原簿がなく、大半のものことは判然としない。定期刊行物も欠けているものがたくさんあり、重複しているものもたくさんある。重複していても寄贈者を尊重してか同一の研究所がそのまま受け入れているケースもある。また、号によっては図書館と経済研究所など別々の⑩が押してあるものもある。つまりもともとは別の場所であって、最終的に今は並んでいるということなのかもしれない。寄贈願いの手紙などは、図書館では行政文書法人文書とともに残されることもあるが、今回の整理では資料の一つとして扱っている。このような附属の書類はもとの状態を記録するように努めている。月報のようなものが出荷時のまま挿み込まれていたケースについても、これもデータ上にはのせないが、何に挿み込まれていたかはメモするようにしている。

今後の課題としては、仮目録に対して皆様からいただくアドバイスなど反省点を踏まえつつ、前述したようにすでに館内に資料がバラバラになっているので、鳥瞰できる総合目録を作りたいと考えている。また、目録の作成だけでなく、内容の画像によるネット上での利用なども検討している。また、今野茂代先生をはじめ旧経済研究所が作成した、樺太関係の目録とも関連付ける必要があろう。なお、編纂室としては、このような資料整理を積み重ねつつ、そのノウハウを学内の文書整理に生かしていきたいとも考えている。

Ⅲ 百年史編纂への構想と課題

1 編纂の構想、方針および課題

編纂の構想および方針については、全くの私的構想段階であり、ま

だ学内での議論は充分ではないが、本編、史料・資料編および写真などのグラフィックで構成された小型本としたい。オーソドックスだが読みやすいものをめざす。『緑丘五十年史』を受けつぎつつ、また先行する各大学の成果にも学びつつ取組むつもりである。全体史と部局史という構成が多く大学の多くでとられているが、小規模な大学ゆえ、解決せねばならない課題も多い。たとえば、経済学史上における小樽学派の位置づけ(手塚寿郎のワルラス研究紹介など)というのは、私たちの手に余るものがある。

九〇周年展以後、百年史編纂室の活動が始まっているが、予算は学長裁量経費および後援会助成金によるものである。さらに本格的な活動をするにあたっては、学内で正式に組織化することが必要であり、その組織は、親委員会(学長ら、後援会長ら)と実質的な編集委員会とで構成されるものになろう。

2 資料の残存状況

全体として、人事関係、庶務関係は比較的良好に残されているが、教授会、授業関係、学生生活関係はほとんど残っていない。また、おそらく多くの大学に共通することと思われるが、新制大学以後の史料の残存状況はひどく悪い。前述したように、90周年展、史料展示室の設置にあたっては、『校友会雑誌』(1913年3月創刊)や学生が1925年6月から戦前戦後を通じて発行していた『緑丘新聞』の記事、あるいは、学生のノート、職員が職務上作成したメモなどで補完している。

学生関係については、卒業論文や「生徒銓衡表」などがある。卒業論文は、保存をしていない時期もあるが、創立当初の頃のものは、北海道や樺太の産業調査報告であり、当時の状況を知る上で貴重なものである。大正期後半からは、経済理論、学説史、社会問題など対象が広がっている。その他、外国語劇なども開催された緑丘祭のポスターやパンフレット、記念講演会の案内、学園生活を写した写真なども収集している。なお、人事関係では、表にあるように、保存期限を超過して残された、教職員適格審査関係の書類がある。「教職不適格者」とされた二人分の解除にいたるまでの手紙、電報類の控えや、陸軍将校であったため勅令で指定解職された職員一名のものも含め、全教職員

の書類が綴じられている。

新制大学以降のものは少ないが、個人の執務参考資料として残されているものもある。最近では、「大学紛争」関係のピラや写真を学務課からいただき、また本学のもと教員から給与明細をお送りいただいた。卒業生らへの呼びかけも必要である。

Ⅳ 大学内における行政文書（法人文書）等の管理状況調査

1 調査の実施

学内で今後の編纂室によるアーカイブズ資料収集等のための、行政文書（法人文書）に関する調査を2003年10月と11月に行ったが、本稿では紙数の制限もあり、文書管理に直接関わる調査結果の一部のみ掲載する。今回の調査対象者は、学長、事務局長、そして文書管理者のうち各課の課長である。

各課における行政文書等の扱い（今回の調査結果をもとに作成。2003年11月現在。）

	総務課	教務課	会計課	施設課	試験係	図書館	国際企画課	学生課
廃棄処分方法	各担当者/ 課全体	各担当者	係	各担当者	試験係 全体	係長の 責任で	課または他 の課と連携	各担当者
廃棄しない 文書の扱い	課内/ 保管庫	課内 (迅速に処分)	課内/ 保管庫	課内/ 保管庫	係内	図書館内	未発生	課内/ 保管庫
歴史的に 貴重な文書	保管庫	編纂室	保管庫	課内	保管庫	図書館内	未発生	課長引継
記録媒体	紙	紙	紙	紙・MO・FD	紙	紙	紙	紙
更新前HP	一部保存	消滅	作成せず	作成せず	消滅	消滅	作成せず	未更新

2 調査結果について

学長、事務局長の意見の中にも見られたが、開示請求に対する情報公開という現実の要請もあり、今回の調査の範囲では文書管理の適正化には積極的である。しかし、「移管」先の議論がされていないなど

当面の管理に重点が置かれているといえる。その当面の管理についても「廃棄」の方法や時期などが各課で異なっているということが確認された。この点については、本学として統一的な基準を設ける必要がある。「公文書館等」とは何かという問題に関連して、学長の意見にあった国立公文書館への移管というのはあまり現実的ではないようである。というのも国立公文書館は今のところ私立大学など民間の文書を扱う予定はなく、中央省庁の文書で保存年限の過ぎたものの管理を課題とし、その機能は限定的である。教員の文書管理については、教授会の配布物などは同じものを総務課が管理しており、情報公開法の開示請求などで実際上の問題はないと考えられる。しかし、ゼミなどの授業や研究活動についても編纂室として把握していくことは大学の歴史を考える上でひとつの課題である。なお、今回の調査では、各学科、言語センター、ビジネス創造センター、保健管理センター、情報処理センター、各教員等は対象とすることができなかった。この点については将来の課題としたい。

廃棄される文書の保存あるいは移管という問題は近い将来に解決する必要があるが、当面は保存年限の短いものの廃棄を急ぐことなく、いわゆる「中間書庫」へ保存年限の過ぎたものや日々の業務で使用予定のない文書を移しておき、仮の整理をして評価選別を先送りするという考え方もありうる。編纂室の特に文書の資料収集活動は、各課からの借り出しという形をとりつつ、結局は部分的な「中間書庫」作りにもなるはずである。編纂作業があくまでも主な仕事ではある。しかし、限られた人員と予算の中でも「中間書庫」の整理を進展させることができれば、大学が説明責任を果たすための基礎資料の準備や百年史編纂作業を進めることになるだけでなく、将来の編纂作業や大学史研究等にも有用である。

おわりに

—百年史編纂から将来の小樽商科大学アーカイブズへ—

名古屋大学大学文書資料室のようにレコードマネジメントの機能を併せ持ち、事務の効率化に積極的な役割を果たすという方向性も興味

深い。実際、非現用文書を主な対象として活動している京都大学大学図書館も、事務の効率化には一定の役割を果たしているそうである。あるいは、非現用文書の管理機関として、学外の地元企業等の文書をも受け入れる、北海道の(経済)資料センターとして展開していくということも、歴史学とくに経済史、経営史への貢献も含めて、充分考えられよう。

将来の小樽商科大学アーカイブズ像はどのように描かれるであろうか。百周年記念事業の一つとして「記念館」が建設される。入るとそこは、ジオラマを中心に常設展と特別展に区分けされた史料展示室である。その奥には、継続的に本学関係史料の収集、研究のための拠点がある。半現用、非現用文書の保管、活用機関という性格も併せ持つであろう。加えて、旧校舎のデザインを取り入れたこの建物は、教職員、学生、卒業生、市民の学習、交流の場でもある。

<参考文献>

緑丘五十年史編集委員会『緑丘五十年史』小樽商科大学 1961年7月

復刻版『緑丘』全3巻 不二出版 1992年3月

小樽高商史研究会編『小樽高商の人々』小樽商科大学 2002年3月

平井孝典「小樽商科大学百年史編纂室の活動およびその課題」『小樽商科大学 人文研究』108 2004年9月

荻野富士夫 平井孝典「小樽商科大学アーカイブズ」『日本の大学アーカイヴズ』京都大学出版 2005年3月(予定)